

芥川龍之介

問
中
問
答



閩 中 問 答

一

或声 お前は俺の思惑おもわくとは全然違つた人間だつた。

僕 それは僕の責任ではない。

或声 しかしお前はその誤解にお前自身も協力して
いる。

僕 僕は一度も協力したことはない。

或声 しかしお前は風流を愛した、——或は愛したよ
うに装よそおつたろう。

僕 僕は風流を愛している。

或声 お前はどちらかを愛している？ 風流か？ そ

れとも一人の女か？

僕 僕はどちらも愛している。

或声 （冷笑）それを矛盾とは思わないと見えるな。

僕 誰が矛盾と思うものか？ 一人の女を愛するもの

は古瀬戸こせとの茶碗を愛さないかも知れない。しかしそれは古瀬戸の茶碗を愛する感覚を持たないからだ。

或声 風流人はどちらかを選ばなければならぬ。

僕 僕は生憎あいにく風流人よりもずっと多慾に生まれついて

いる。しかし将来は一人の女よりも古瀬戸の茶碗を選ぶ
かも知れない。

或声 ではお前は不徹底だ。

僕 若しそれを不徹底と云うならば、インフルエンザ
に罹かかった後のちも冷水れいすい摩擦まさつをやっているものは誰よりも徹底
しているだろう。

或声 もう強がるのはやめにしてしまえ。お前は内心
は弱っている。しかし当然お前の受ける社会的非難をは
ね返す為にそんなことを言っているだけだろう。

僕 僕は勿論そのつもりだ。第一考えて見るが善いい。

はね返さなかつたが最後、押しつぶされてしまう。

或声 お前は何と云う凶々しい奴だ。

僕 僕は少しも凶々しくはない。僕の心臓は瑣細ささいな事
にあつても氷のさわつたようにひやひやとしている。

或声 お前は多力者たりによくしやのつもりでいるな？

僕 勿論僕は多力者の一人だ。しかし最大の多力者ではない。若し最大の多力者だったとすれば、あのゲエテと云う男のように安んじて偶像になつていたであらう。

或声 ゲエテの恋愛は純潔だった。

僕 それは嘘だ。文芸史家の嘘だ。ゲエテは丁度三十

五の年に突然伊太利^{イタリイ}へ逃走している。そうだ。逃走と云う外はない。あの秘密を知っているものはゲエテ自身を例外にすれば、シユタイン夫人一人だけだろう。

或声 お前の言うことは自己弁護だ。自己弁護位手易いものはない。

僕 自己弁護は容易ではない。若し手易いものとすれば、弁護士と云う職業は成り立たない筈だ。

或声 口巧者^{くちごうしゃ}な横着ものめ！ 誰ももうお前を相手にしないぞ。

僕 僕はまだ僕に感激を与える樹木や水を持ってい

る。それから和漢東西の本を三百冊以上持っている。

或声　しかしお前は永久にお前の読者を失ってしまうぞ。

僕　僕は将来に読者を持っている。

或声　将来の読者はパンをくれるか？

僕　現世の読者さえ碌にしてくれない。僕の最高の原稿料は一枚十円に限っていた。

或声　しかしお前は資産を持っていたらう？

僕　僕の資産は本所にある猫の額ほどの地面だけだ。

僕の月収は最高の時でも三百円を越えたことはない。

或声　しかしお前は家を持っている。それから近代文芸読本の……

僕　あの家の棟木むなぎは僕には重たい。近代文芸読本の印税はいつでもお前に用立ててやる。僕の貰ったのは四五百円だから。

或声　しかしお前はあの読本の編者だ。それだけでもお前は恥じなければならぬ。

僕　何を僕に恥じろと云うのだ？

或声　お前は教育家の仲間入りをした。

僕　それは嘘だ。教育家こそ僕等の仲間入りをしてい

る。僕はその仕事を取り戻したのだ。

或声 お前はそれでも夏目先生の弟子か？

僕 僕は勿論夏目先生の弟子だ。お前は文墨ぶんぼくに親しんだ漱石先生を知っているかも知れない。しかしあの氣違あいじみた天才の夏目先生を知らないだろう。

或声 お前には思想と云うものはない。偶々たまたまあるのは矛盾だらけの思想だ。

僕 それは僕の進歩する証拠だ。阿呆あほうはいつまでも太陽は盥たらひよりも小さいと思っている。

或声 お前の傲慢はお前を殺すぞ。

僕 僕は時々こう思っている。——或は僕は畳の上では往生しない人間かも知れない。

或声 お前は死を恐れないと見えるな？ な？

僕 僕は死ぬことを怖れている。が、死ぬことは困難ではない。僕は二三度頸をくくったものだ。しかし二十秒ばかり苦しんだ後は或快感さえ感じて来る。僕は死よりも不快なことに会えば、いつでも死ぬのにためらはないつもりだ。

或声 ではなぜお前は死なないのだ？ お前は誰の目から見ても、法律上の罪人ではないか？

僕 僕はそれも承知している。ヴェルレエンのように、ワグナアのように、或は又大いなるストリントベリイのように。

或声 しかしお前は贖あがなはない。

僕 いや、僕は贖あがなっている。苦しみにまざる贖いはない。

或声 お前は仕かたのない悪人だ。

僕 僕は寧ろ善男子ぜんなんしだ。若し悪人だったとすれば、僕のように苦しみはしない。のみならず必ず恋愛を利用し、女から金を絞るだろう。

或声 ではお前は阿呆かも知れない。

僕 そうだ。僕は阿呆かも知れない。あの「痴人の懺悔」などと云う本は僕に近い阿呆の書いたものだ。

或声 その上お前は世間見ずだ。

僕 世間知りを最上とすれば、実業家は何よりも高等だろう。

或声 お前は恋愛を軽蔑していた。しかし今になって見れば、ひっきょう畢竟恋愛至上主義者だった。

僕 いや、僕は今日でも断じて恋愛至上主義者ではない。僕は詩人だ。芸術家だ。

或声　しかしお前は恋愛の為に父母妻子を抛なげうったではないか？

僕　嘘をつけ。僕は唯僕自身の為に父母妻子を抛ったのだ。

或声　ではお前はエゴイストだ。

僕　僕は生憎エゴイストではない。しかしエゴイストになりたいたいのだ。

或声　お前は不幸にも近代のエゴ崇拜にかぶれてい
る。

僕　それでこそ僕は近代人だ。

或声 近代人は古人に若しかない。

僕 古人も亦一度は近代人だったのだ。

或声 お前は妻子を憐あわれまないのか？

僕 誰か憐まらずにいられたものがあるか？ ゴオギヤ

アンの手紙を読んで見る。

或声 お前はお前のしたことをどこまでも是認するつもりだな。

僕 どこまでも是認しているとすれば、何もお前と問答などはしない。

或声 ではやはり是認しずにいるか？

僕 僕は唯あきらめている。

或声 しかしお前の責任はどうする？

僕 四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然、——僕の責任は四分の一だけだ。

或声 お前は何と云う下等な奴だ！

僕 誰でも僕位は下等だろう。

或声 ではお前は悪魔主義者だ。

僕 僕は生憎悪魔主義者ではない。殊に安全地帯の悪魔主義者には常に軽蔑を感じている。

或声 （暫く無言）兎に角お前は苦しんでいる。それ

だけは認めてやっても善い。

僕 いや、うっかり買い冠かぶるな。僕は或は苦しんでい
ることに誇りを持っているかも知れない。のみならず「得
れば失うを惧おそる」は多力者のすることではないだろう。

或声 お前は或は正直者かも知れない。しかし又或は
道化者かも知れない。

僕 僕も亦どちらかと思っている。

或声 お前はいつもお前自身を現実主義者と信じてい
た。

僕 僕はそれほど理想主義者だったのだ。

或声 お前は或は滅びるかも知れない。

僕 しかし僕を造ったものは第二の僕を造るだろう。

或声 では勝手に苦しむが善い。俺はもうお前に別れるばかりだ。

僕 待て。どうかその前に聞かせて呉れ。絶えず僕に問いかけるお前は、——目に見えないお前は何ものだ？

或声 俺か？ 俺は世界の夜明けにヤコブと力を争った天使だ。

或声 お前は感心に勇氣を持っている。

僕 いや、僕は勇氣を持っていない。若し勇氣を持っているとすれば、僕は獅子の口に飛び込まずに獅子の食うのを待っているだろう。

或声 しかしお前のしたことは人間らしさを具えている。

僕 最も人間らしいことは同時に又動物らしいことだ。

或声 お前のしたことは悪いことではない。お前は唯現代の社会制度の為に苦しんでいるのだ。

僕 社会制度は変わったとしても、僕の行為は何人かの人を不幸にするのに極まっている。

或声 しかしお前は自殺しなかった。兎に角お前は力を持っている。

僕 僕は度たび自殺しようとした。殊に自然らしい死にかたをする為に一日に蠅を十匹ずつ食った。蠅を細かにむしった上、のみこんでしまうのは何でもない。しかし噛みつぶすのはきたない気がした。

或声 その代りお前は偉大になるだろう。

僕 僕は偉大さを求めていない。欲しいのは唯平和だけだ。ワグネルの手紙を読んで見ろ。愛する妻と二人の子供と暮らしに困らない金さえあれば、偉大な芸術などは作らずとも満足すると書いている。ワグネルでさえこの通りだ。あの私の強いワグネルでさえ。

或声 お前は兎に角苦しんでいる。お前は良心のない人間ではない。

僕 僕は良心などを持っていない。持っているのは神経ばかりだ。

或声 お前の家庭生活は不幸だった。

僕 しかし僕の細君はいつも僕に忠実だった。

或声 お前の悲劇は他の人々よりもたくま逞しい理智を持っていることだ。

僕 嘘をつけ。僕の喜劇は他の人々よりも乏しい世間智を持っていることだ。

或声 しかしお前は正直だ。お前は何ごととも露れないうちにお前の愛している女の夫へ一切の事情を打ち明けてしまった。

僕 それも嘘だ。僕は打ち明けずにはいられない気も

ちになるまでは打ち明けなかった。

或声 お前は詩人だ。芸術家だ。お前には何ごととも許されている。

僕 僕は詩人だ。芸術家だ。けれども又社会の一分子だ。僕の十字架を負うのは不思議ではない。それでもまだ軽過ぎるだろう。

或声 お前はお前のエゴを忘れている。お前の個性を尊重し、俗悪な民衆を軽蔑しろ。

僕 僕はお前に言われずとも僕の個性を尊重している。しかし民衆を軽蔑しない。僕はいつかこう言った。

——「玉は砕けても、瓦は砕けない。」シエクスピイアや、ゲエテや近松門左衛門はいつか一度は滅びるのである。しかし彼等を生んだ胎たいは、——大いなる民衆は滅びない。あらゆる芸術は形を変えても、必ずそのうちから生まれるであろう。

或声 お前の書いたものは独創的だ。

僕 いや、決して独創的ではない。第一誰が独創的だったのだ？ 古今の天才の書いたものでもプロトタイプは至る所にある。就なかんずく中僕は度たび盗んだ。

或声 しかしお前は教えてもいる。

僕 僕の教えたのは出来ないことだけだ。僕に出来ることだったとすれば、教えない前にしてしまったであろう。

或声 お前は超人だと確信しろ。

僕 いや、僕は超人ではない。僕等は皆超人ではない。超人は唯ツアラトストラだけだ。しかもそのツアラトストラのどう云う死を迎えたかはニイチエ自身も知らないのだ。

或声 お前さえ社会を怖れるのか？

僕 誰が社会を怖れなかったか？

或声 牢獄に三年もいたワイルドを見る。ワイルドは「^{みだ}妄りに自殺するのは社会に負けるのだ」と言っている。

僕 ワイルドは牢獄にいた時に何度も自殺を計っている。しかも自殺しなかったのは唯その方法のなかったばかりだ。

或声 お前は善悪を蹂躪^{じゆうりん}してしまえ。

僕 僕は今後もいやが上にも善人になろうと思ってい
る。

或声 お前は余り単純過ぎる。

僕 いや、僕は複雑過ぎるのだ。

或声　しかしお前は安心しろ。お前の読者は絶えないだろう。

僕　それは著作権のなくなった後だ。

或声　お前は愛の為に苦しんでいるのだ。

僕　愛の為に？　文学青年じみたお世辞は好いい加減にしろ。僕は唯情事に躓つまずいただけだ。

或声　誰も情事には躓つまき易い。

僕　それは誰も金銭の慾おぼに溺れ易いと云うことだけだ。

或声　お前は人生の十字架にかかっている。

僕 それは僕の自慢にはならない。情婦殺しや拐帯犯かいたい人も人生の十字架にかかっているのだ。

或声 人生はそんなに暗いものではない。

僕 人生は「選ばれたる少数」を除けば、誰にも暗いのはわかっている。しかも又「選ばれたる少数」とは阿呆と悪人との異名なのだ。

或声 では勝手に苦しんでいる。お前は俺を知っているか？ 折角お前を慰めに來た俺を？

僕 お前は犬だ。昔あのファウストの部屋へ犬になつてはいつて行った悪魔だ。

三

或声 お前は何をしているのだ？

僕 僕は唯書いているのだ。

或声 なぜお前は書いているのだ。

僕 唯書かずにはいられないからだ。

或声 では書け。死ぬまで書け。

僕 勿論、——第一その外ほかに仕かたはない。

或声 お前は存外落ち着いている。

僕 いや、少しも落ち着いてはいない。若し僕を知っている人々ならば、僕の苦しみを知っているだろう。

或声 お前の微笑はどこへ行つた？

僕 天上の神々へ帰ってしまった。人生に微笑を送る為に第一には吊り合いの取れた性格、第二に金、第三に僕よりも逞しい神経を持っていなければならぬ。

或声 しかしお前は気軽になつたろう。

僕 うん、僕は気軽になつた。その代りに裸の肩の上に一生の重荷を背負わなければならぬ。

或声 お前はお前なりに生きる外ほかはない。或は又お前

なりに……

僕 そうだ。僕なりに死ぬ外はない。

或声 お前は在来のお前とは違った、新らしいお前になるだろう。

僕 僕はいつでも僕自身だ。唯皮は変わるだろう。蛇の皮を脱ぎ変えるように。

或声 お前は何も彼も承知している。

僕 いや、僕は承知していない。僕の意識しているのは僕の魂の一部分だけだ。僕の意識していない部分は、
——僕の魂のアフリカはどこまでも茫々ぼうぼうと広がって

る。僕はそれを恐れているのだ。光の中には怪物は棲ま^すない。しかし無辺の闇の中には何かはまだ眠っている。

或声 お前も亦俺の子供だった。

僕 誰だ、僕に接吻したお前は？ いや、僕はお前を

知っている。

或声 では俺を誰だと思う？

僕 僕の平和を奪ったものだ。僕のエピキュリアニズムを破ったものだ。僕の、——いや、僕ばかりではない。

昔支那の聖人の教えた中庸の精神を失わせるものだ。お前の犠牲になったものは至る所に横わっている。文学史

の上にも、新聞記事の上にも。

或声 それをお前は何と呼んでいる？

僕 僕は——僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言葉を借りれば、お前は僕等を超えた力だ。僕等を支配する *Daimôn* だ。

或声 お前はお前自身を祝福しろ。俺は誰にでも話しには来ない。

僕 いや、僕は誰よりもお前の来るのを警戒するつもりだ。お前の来る所に平和はない。しかもお前はレントゲンのようにあらゆるものを滲透して来るのだ。

或声 では今後も油断するな。

僕 勿論今後は油断しない。唯ペンを持っている時には……

或声 ペンを持っている時には来いと云うのだな。

僕 誰が来いと云うものか！ 僕は群小作家の一人だ。又群小作家の一人になりたいと思っているものだ。平和はその外に得られるものではない。しかしペンを持っている時にはお前のとりこ俘になるかも知れない。

或声 ではいつも気をつけていろよ。第一俺はお前の言葉を一々実行に移すかも知れない。ではさようなら。

いつか又お前に会いに来るから。

僕（一人になる。）芥川龍之介！ 芥川龍之介、お前の根をしっかりとおろせ。お前は風に吹かれている葦だ。あし空模様はいつ何時変わるかも知れない。唯しっかりと踏んばっている。それはお前自身の為だ。同時に又お前の子供たちの為だ。うぬ惚ぼれるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

（昭和二年、遺稿）

日本文学電子図書館

「或阿呆の一生・歯車」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和41年4月30日 17版発行



日本文学電子図書館